様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００１５２

研究課題名（和文）庭園における観察者の身体とオブジェクト群の空間的パターン動態の分析

研究課題名（英文）Analysis of the Spatial Patterns of Objects and the Relationship with the Observer's Body within the Garden

研究代表者
山内　朋樹（Yamauchi, Tomoki）

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０７６９３１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　庭は多くの場合、図像的(虎の子渡し、三尊仏、鶴亀等)あるいは歴史的観点から見られ、分析される。しかし庭は、具体的な物と物とが複雑に結びつけられた造形的構成でもあるだろう。
　本研究はこうした前提から京都府福知山市の丹州観音寺、大聖院庭園の作庭工事を取材し、職人たちがどのように石を据えるか、どのように樹木を植栽するかについてスケッチ、メモ、写真、動画で克明に記録し、庭のかたちがどのように生まれてくるのかについて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は庭園研究では類例がない作庭現場のフィールドワークから庭のかたちがどのように生まれてくるのか、そこで働く職人たちはどのようにコミュニケーションし、各々の制作意図を折衝しながら作業を進めていくのかについて調査した点に特色がある。これによって、とりわけ石組をたんに図像的、歴史的に読解するだけでなく、具体的な物体の造形的構成として分析する可能性を示した。また、こうした研究成果の一部をネット上の連載記事や一般書籍にまとめて公開することで、新しい庭の見かたを広く提示することができた。

研究成果の概要（英文）：　In many cases, gardens are analyzed from a iconographical and historical aproach, but they can also be seen as plastic compositions created by objects. Before delving into a deep analysis from a iconographical and historical viewpoint, it is possible to simply perceive the plastic composition, including stones, plants, and structures placed within the garden.
　With this problem set, we designated Tanshu Kannonji Temple in Fukuchiyama City, Kyoto as the field site and recorded the process of creating the Daishoin Garden from the very first day. The work of the gardeners was documented through sketches, notes, photographs, and videos, and interviews were conducted as well. By meticulously recording how the gardeners place stones and plant trees, among other details, we were able to gain an understanding of how the form of the garden is created.

研究分野：美学

キーワード：石組　庭　フィールドワーク　庭師　作庭　庭園　観音寺　大聖院庭園

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　これまで、石組については抽象的な形容（力強い、平明な等）がなされるか、図像的な解釈（三尊石、鶴亀島、蓬莱島等）がなされることが多く、「この石組はなぜこうなっているのか？」という疑問にたいして造形的観点から答えるものは少なかった。

(2)　庭そのものについても歴史的、文化史的文脈や施主や庭師の好みから語られることが多く、やはり「この庭はなぜこうなっているのか？」という疑問にたいして造形的観点から答えるものは少なかった。

(3)　庭をつくる際、職人たちが実際にどのような会話を交わし、どのような判断を積み重ねて石や植物を配置しているのかについても、これまでわずかな例外を除いてあまり知られていなかった。

２．研究の目的

よって本研究では、上記のような背景のうえで、

(1)　庭における物体（石、植物、構造物等）のかたちや配置に注目し、図像や歴史の手前にひろがるかたちの論理を明らかにすることを目指した。

(2)　庭について造形的観点からの語りを試みることで、図像的、歴史的語り以外の庭へのアクセスのしかたをつくりだし、これまでとは異なる層に庭の新しい見かたや楽しみかたを届ける可能性を模索した。

(3)　本項目と次の項目は下記「３．研究の方法」(1) に記した研究方法の変化によって可能となったものだが、庭がつくられていく様子を徹底して記録することで、具体的に石などの物体がどのような順序で、どのように配置され、どのように他の物体と関係づけられていくのかという庭のかたちの論理を、発生の現場から理解しようとした。

(4)　また、職人たちが現場でどのような会話を交わし、どのような判断を積み重ねているのかを詳細に記録することで、物体がどのように配置されていくのか、庭がどのようにつくられていくのか、庭師たちはどのように互いの意図を折衝していくのか等について、つくる側の観点も含めて明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

(1)　やや長くなるが、最初に研究方法の修正について書いておきたい。当初は日本と海外のすでに完成している庭を徹底的にフィールドワークすることで、「２．研究の目的」(1) (2) のような庭のかたちの論理を遡行的に明らかにする予定だった。しかしながら研究期間開始直前、新型コロナウイルス感染症の世界的流行がはじまり、現地フィールドワークを重視する本研究にとって厳しいことに海外渡航がほぼ不可能となり、県外移動でさえ憚られるような状況になった。だが、本研究の目的を達成するには、これから庭づくりがはじまる現場をフィールドワークすることも必要だとも考えていたため、同時に京都の作庭グループにも新規作庭工事があればフィールドワークをさせてほしいと声をかけていた。幸運なことにも研究期間中の 2020 年 4 月 6 日に先の作庭グループから連絡があり、翌日から京都府福知山市にある丹州観音寺で庭づくりがはじまることになったため、当初の予定から研究方法を修正し、実際につくられていく庭を初日から最終日までフィールドワークすることで、庭のかたちがどのようにして生まれてくるのか、あるいはひとつひとつの石や植物がどういった意図にもとづいて配置されていくのかを現地調査することにした。

(2)　具体的には、石や植物がどのような順序で据えられ、植えられていくかをメモ、スケッチ、写真、動画によって克明に記録すると同時に、施主となる住職の意図や親方や職人たちの意図を理解するために逐次インタビューをおこなった。作庭期間中に記録を定期

的に整理してまとめ直し、作庭プロセスと照らし合わせながらブロックごとに文章に起こしていった。

(3)　最後に、株式会社都市景観設計と株式会社相互技研の協力により、完成した庭の物体の配置や地形データの測量、3Dデータを収集し、樹種と石質の大まかな調査をおこない、この庭および周辺状況の詳細な情報を記録した。結果は 100 分の 1 および 200 分の 1 の平面図データと 3Dデータにまとめた。

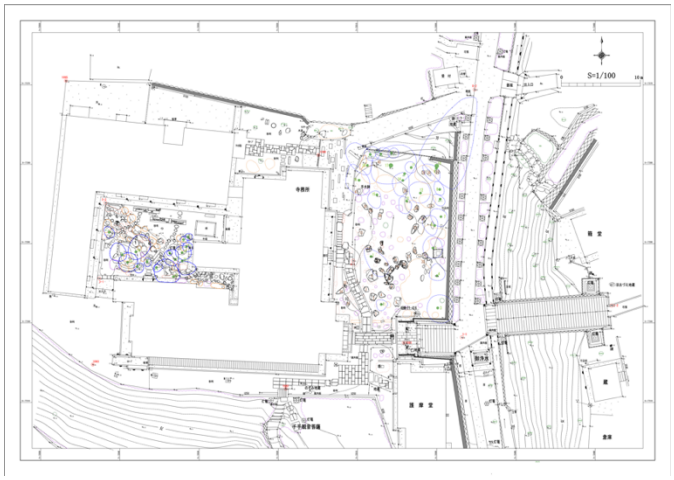
4．研究成果

本研究から明らかになった理論的成果として、造形的観点から（1）が、共同制作の観点から（2）があり、具体的成果として（3）（4）がある。

(1)　「石の求めるところにしたがう」という『作庭記』の記述は、これまで明確に説明されないか、擬人化として退けられることが多かったが、本研究では石をひとつ置くごとに変化する造形的布置としての庭が、職人の行為をうながし、次の石の配置を拘束していく様子を詳細に確認することができた。また、石相互が図像的構成によってではなく、形態的な反復や流れや呼応関係によって造形的構成として結びつけられていることを克明に観察することができた。

(2)　設計図のない制作において、職人たちが人々と事物を相互に結びつける設計図に準ずる媒体をその都度つくりだしながら、者と物の仮の共同性をかたちづくっていくかを明らかにすることができた。また、その折衝のなかで、どのようにして相互に矛盾しあう人々の意図や事物の関係が束ねられていくかを具体的に観察することができた。職人たちの特徴的な言葉遣い（偸む、捨てる、てみる、てやる等）や、身体と道具の使いかたについて詳細に記録し、分析できたのも大きな成果である。

(3)　本研究の具体的成果としては、研究期間後半となる 2021 年 12 月 8 日から 2023 年 2 月 20 日までのあいだ、フィルムアート社ウェブサイトにおいて、「庭のかたちが生まれるとき」というタイトルで、本研究の成果を全 12 回の連載にまとめることができたこと（右図参照）、また、この連載に数章を加えた書籍を、同社から同タイトルで 2023 年 8 月末出版する予定になっていることだ。これによって研究成果をひろく公開することができる。



(4)　もうひとつの具体的成果としては、大聖院庭園作庭プロセスについてのスケッチ、写真、動画等々の大量のデータを記録できたこと、加えて「３．研究の方法」(3) で記したとおり、100 分の 1 および 200 分の 1 の平面図データと 3Dデータを記録できたことだ（左図参照）。これらのデータに現時点での価値は少ないが、将来的には歴史的資料になりうると考えられる。これらのデータのうち、写真の一部と平面図については書籍に収録し、ひろく公開する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山内朋樹	４．巻 -
２．論文標題 「石の求めるところにしたがう」とはどういうことか？――庭師の行為を触発するもの	５．発行年 2022年
３．雑誌名 かみのたね（http://www.kaminotane.com/2022/01/19/18733/）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山内朋樹	４．巻 -
２．論文標題 石組の正体――他性の濁流をおさめる	５．発行年 2022年
３．雑誌名 かみのたね（http://www.kaminotane.com/2022/02/24/18975/）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山内朋樹	４．巻 -
２．論文標題 庭師たちはいかにしてともに働くか？ ――延段の高さを設定する	５．発行年 2022年
３．雑誌名 かみのたね（http://www.kaminotane.com/2022/03/23/19289/）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山内朋樹	４．巻 -
２．論文標題 設計図とはなにをしているのか？ ――人々と諸事物を折衝するもの	５．発行年 2022年
３．雑誌名 かみのたね（http://www.kaminotane.com/series/18302/）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山内朋樹	4．巻 -
2．論文標題 石と石とが結びつくとき ――布石のなかに生まれる類似、反復、リズム	5．発行年 2022年
3．雑誌名 かみのたね（http://www.kaminotane.com/series/18302/）	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山内朋樹	4．巻 -
2．論文標題 意図しないものの蓄積とパターン ――斜交いの流れの発生	5．発行年 2022年
3．雑誌名 かみのたね（http://www.kaminotane.com/series/18302/）	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山内朋樹	4．巻 -
2．論文標題 露出した岩盤としての石組 ――あってないような庭とありてある庭	5．発行年 2022年
3．雑誌名 かみのたね（http://www.kaminotane.com/series/18302/）	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山内朋樹	4．巻 -
2．論文標題 バラバラの物をDIYで結びつけよ！ ――庭師たちによる物の変換とコミュニケーション	5．発行年 2022年
3．雑誌名 かみのたね（http://www.kaminotane.com/series/18302/）	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山内朋樹	4．巻 -
2．論文標題 庭師の知恵と物騒な共存 ――矛盾しあったままの整合をつくりあげる	5．発行年 2022年
3．雑誌名 かみのたね（http://www.kaminotane.com/series/18302/）	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山内朋樹	4．巻 -
2．論文標題 石を片づけるときに起こること ――半弧の布石と見る者の身体	5．発行年 2023年
3．雑誌名 かみのたね（http://www.kaminotane.com/series/18302/）	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

1．著者名 山内朋樹	4．発行年 2023年
2．出版社 フィルムアート社	5．総ページ数 400
3．書名 庭のかたちが生まれるとき ――庭園の詩学と庭師の知恵	

〔産業財産権〕

〔その他〕

MISC
・【対談原稿】池田剛介＋山内朋樹「生まれ直す庭――芸術論の新たな展開 06」『Real Kyoto』（http://realkyoto.jp/article/inteview-by-ikeda-kosuke06/）、2019年10月2日。
・【レクチャー原稿】山内朋樹「フィールドワークを言葉にする」『Jodo Journal』3号、浄土複合、44-53頁、2022年4月10日。
・【シンポジウム原稿】髙橋悟＋田中功起＋松村圭一郎＋山内朋樹「潜在的コモンズの周辺――持ち去られたラジオ・欲しくない貰い物・なつけること」『共生と分有のトポス――公共空間における潜在的コモンズとその連環デザイン』京都市立芸術大学、72-107、160-185頁、2023年3月31日。

講演・口頭発表
・山内朋樹「ありあわせの即興――作庭現場における構造の発生1」『庭園アーカイヴ・プロジェクト、YCAM研究会4、科学研究費補助金基盤研究（B）「日本庭園の総合的アーカイヴの開発をめぐる研究」（代表：原瑠璃彦）』Zoom、2020年4月18日。
・山内朋樹「おさめる――作庭現場における構造の発生2」『庭園アーカイヴ・プロジェクト、YCAM研究会4、科学研究費補助金基盤研究（B）「日本庭園の総合的アーカイヴの開発をめぐる研究」（代表：原瑠璃彦）』Zoom、2020年5月30日。
・山内朋樹「偸む――作庭現場における構造の発生3」『庭園アーカイヴ・プロジェクト、YCAM研究会4、科学研究費補助金基盤研究（B）「日本庭園の総合的アーカイヴの開発をめぐる研究」（代表：原瑠璃彦）』Zoom、2020年8月1日。
・山内朋樹「フィールドワークを言葉にする」浄土複合、2021年10月10日。
・山内朋樹「石群の思考」『宵山ゼミ「叢の思考」』北大路ハウス、2022年7月16日。
・髙橋悟＋田中功起＋松村圭一郎＋山内朋樹「潜在的コモンズの周辺――持ち去られたラジオ・欲しくない貰い物・なつけること」『共生と分有のトポス 第2部』京都国立近代美術館講堂、2022年11月5日。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関